



一日一前

校長室通信

第 6 号

平成 29 年 10 月 13 日



10月 「長生きする人は多くを知る、旅をした人はそれ以上を知る」

高校時代の見学旅行を含めて、私は見学旅行に13回行きました。まさか自分の人生で、これだけ京都や奈良に行くことになるとは思いませんでした。いつの時も、壮大な奈良の大仏や聖徳太子の生きていた時代に建立された法隆寺が変わることなく待っていてくれ、北海道の高校生に歴史や伝統の重みというものを教えてくれます。

また過去に勤務した高校では、十分に検討した企画が見学旅行日程に組み込まれ、座禅、川下り、スキューバ体験、戦争体験・被爆体験講話、船中泊移動、企業訪問、観光 PR など生徒の高校生活後半に生きる取組が数多くありました。また乗り物も新幹線、寝台列車、飛行機、船、バス、観光タクシー、モノレールとあらゆる交通手段を活用し、生徒に体験させていました。

以前、スキー場のすぐ下にある南陵高校に勤めていたとき、冬になると九州や四国、関西から多くの見学旅行生が訪れ、スキー体験学習を行い交流しました。初めて触る雪に感動しながら、スキーで滑ることはおろか、立ち上げることもできない高校生達が一生の思い出になったと言って、笑顔で帰って行ったのを覚えています。彼らにとって降り積もった雪に立つという経験は、月面に立つのと同じくらい幻想的で不思議な体験だったとのことです。また、智恵と工夫で辛い冬を乗り切る北国の人間に畏敬の念を持ち、北海道人が他者を思いやり、大らかな心があるという県民性まで学んで帰るとのことで、ほとんどの本州の高校生が帰ると、少し気持ちが優しくなる傾向があると聞き、見学旅行には十分な教育効果があることを認識したことがありました。

見学旅行は近代日本の学校が作り出した「集団で遠地に旅行する」という世界的にも珍しい学校行事です。1886年に始まり、徒歩で約1ヶ月かけて、長野・山梨・静岡・神奈川の山々を歩きました。1890年代には全国に広まり、約2週間程の旅程となりました。やがて1900年代に入ると鉄道が利用され、より遠地に出かけるようになり、北海道の高校生も1泊ぐらいで京都・奈良・東京へと行くようになりました。それから100年以上の時が流れる中で、7泊8日が5泊6日となり、平成に入り、飛行機の利用が主流となると4泊5日となり、さらに最近は3泊4日まで見学旅行は変化してきました。



なぜ見学旅行が日本の学校の伝統行事としてここまで残ったのでしょうか。それは、日本人の団 thểで行動する能力の高さ、時間に厳格な国民性、他者を思いやる繊細な神経、物作りの器用さなど見学旅行がそれらの訓練の場となってきたと言われているからです。また、高校生活の折り返し地点として、見学旅行までにどのような生徒に成長させるか、見学旅行後に何をどう指導してゆくかの一歩分りやすい目安として見学旅行という行事を活用してきました。

昔の人達は言いました。「かわいい子には旅をさせよ」「百聞は一見にしかず」と。また世界の格言の一つにこうあります。「長生きする人は多くを知る。旅をしたものはそれ以上を知る」と。旅は人間を成長させる楽しい体験の場です。見学旅行で様々な経験を積み、その経験が後半の高校生活につながってほしいと願っています。旅行中の楽しさや遊びに、生徒を成長させる教師側の戦略が必要です。

